サウスバンクセンターにおける事業展開とカルチュラル・オリンピアード及びレガシーについて

石川県立音楽堂 事業部 オーケストラ担当副部長　床坊剛
東京文化会館 事業企画課 主事　大村貴子

1. サウスバンクセンターの概要

サウスバンクセンター（以下SBC）は、イギリスを代表する文化施設で、ロンドンのテムズ川南岸に広がる21エーカーの広大な敷地に、ロイヤル･フェスティバル･ホールなど3つのホールとギャラリー等を有する。

その歴史は、1951年に開催されたフェスティバル・オブ・ブリテンに遡る。「想像のプロパガンダ」をキャッチフレーズに、第二次世界大戦後に停滞していたイギリス国民の気運を、文化の力によって盛り上げようという一大事業であった。根底にあったのは、全ての人が芸術文化に触れ、その恩恵を受けることができるという考えであった。

このフェスティバルの会場となったのがSBCで、ロイヤル・フェスティバル・ホールは当時建設され、現存する唯一の施設である。

このように、SBCは「フェスティバルサイト」として建設されたという歴史を持っており、その歴史がアイデンティティとなっている。SBCは人々が集い、祝う場所であるということである。SBCは年間2,700万人が行き交う施設であり、うち800万人が公演やイベントなどに参加している。来場者の数も驚異的だが、むしろ重要なのは「Measure our Hearts（心を測ろう）」というコンセプトである。人々がSBCでの経験から、いかに芸術文化のインパクトを感じるか、そのことによっていかに変革をもたらすか、ということに着目している。

SBCは現在470人ほどのスタッフで運営されており、年間の事業数は大小含めて4,500にものぼる。

2. 事業展開

（1）事業のコンセプト

SBCは、「優れた芸術を人々に見せながら、さまざまな社会的課題を考える機会を観客に与える。そして、その事業を通して常に自問していくことが必要である」と考える。芸術文化が社会を変える強い力を持つという信念をもとに事業が展開されている。

（2）フェスティバル

主となる事業として、あらゆる人々を歓迎し、招き入れ、祝うというアイデンティティの上でさまざまな「フェスティバル」を開催していることが挙げられる。

2013-2014シーズンでは12のフェスティバルを実施しているが、以下、主なフェスティバルを紹介する。

●「The Rest is Noise フェスティバル」（2013年通年）…レジデント・オーケストラによる20世紀の音楽と社会をテーマに書かれたアレックス・ロスの著書「The Rest is Noise」に触発されたプログラムで、聴衆の現代音楽へのアプローチを変化させた。

●「合唱フェスティバル」（2013年5月）…合唱はあらゆる背景をもつ人々が一つとなり、コミュニティに力強くひらめきのある表現力をもたらすというアイデアをもとに、毎年開催されているフェスティバルである。
●「世界婦人フェスティバル」（2014年3月）…真の男女平等が実現に至っていない今、21世紀の男女平等とは何かを考えていくフェスティバルで、2011年以降毎年開催されている。

（3）教育プログラム、無料プログラム、コミュニティ向けプログラム等の展開例

SBCは、芸術文化の目的ははっと驚くことであり、体験することで自己確認ができることであると考える。教育プログラムや無料プログラムは、劇場に足を運んだことがない人に芸術文化を体験してもらう事業である。その結果、SBCの21エーカーの敷地は、英国全ての社会のコミュニティとなっている。

たとえば、教育プログラムでは、エルシステマのムーブメントをモデルとした、クラシックに触れたことがない子どもたちがワークショップに参加するプログラムを実施。無料プログラムでは、世界的オペラ歌手によるバスキング（街頭パフォーマンス）［写真1］によって、一度もオペラを見たことがない人に彼の歌を聴く機会を与えた。コミュニティプログラムでは、動きが困難な高齢者向けに、インドの踊りの動きを教えるワークショップを実施、また、サンゴ礁をモデルにした編み物をとおして、世界中で環境問題のためにサンゴが減っていることを考える機会を与えた。

［写真1］ブライアン・ターフェルによるバスキング

（4）レジデント・オーケストラ

SBCの特徴として、優れた2つのフルオーケストラ（ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、フィルハーモニア管弦楽団）と、2つの室内オーケストラ（ロンドン・シンフォニエッタ、エイジ・オブ・エンライトメント管弦楽団）がレジデント・オーケストラとして公演を実施していることが挙げられる。4つのオーケストラは、SBCのアイデンティティを基に、SBCのフレームワークに沿って企画し事業を展開、2つのフルオーケストラは年間各40公演、2つの室内オーケストラは各10公演を実施している。レジデント・オーケストラが主体となった先述の「The Rest is Noise フェスティバル」は、ロイヤル・フィルハーモニック・ソサエティの優秀賞を受賞するなど高い評価を受けた。

これらの事業はSBCとオーケストラの間で交わされる詳細にわたる契約書を基に行われる。例えば、オーケストラはSBCに使用料（時には優遇された料金）及びチケット販売手数料を支払い、SBCは共同制作費として各オーケストラに年間7万ポンドの補助金を出し、チケットセールスや広報、楽屋接待なども担っている。

3．カルチュラル・オリンピアードとレガシー——アンリミテッド・フェスティバルを例に

（1）カルチュラル・オリンピアードの立ち上げ

2012年のオリンピック開催地がロンドンに決まったのは2005年。現在芸術監督を務めるジュード・ケリー氏が監督就任の要請を受けたのは、ロンドンでのオリンピック開催が決まった当日だった。その際、オリンピックという一つの大きなイベントで全てを変えることはできず、そのレガシーを守っていくことは、文化施設が関わらないとできないと考え、芸術監督の職を受け入れたという。

その後、芸術文化機関が集まって、どのような文化プログラムを行うべきか議論がなされた。組織の間の協力体制を構築するのは大変難しく、時に関係団体の間で争わなければならない場合もあるが、それでも落胆しないことだとケリー氏は話す。

また、非常に複雑ではあるが、個々の芸術文化組織のアイデンティティ、価値を高めつつ、国の価値の

向上にもつながることを話し合っていかなければならなかった。

（2）アンリミテッド・フェスティバルの実施体制と成果

紆余曲折を経て、さまざまな文化プログラムが行われたが、なかでも大きなインパクトを与えたイベントの一つに、アンリミテッド・フェスティバルがある。パラリンピックの開催に合わせて、8月30日から約10日間にわたって開催され、障がい者アーティストによる音楽や演劇、ダンスなど、全部で29の作品が紹介された。

このフェスティバルは大きな成功を収め、機運が盛り上がったので、以後2年ごとに開催されることになった。2014年に引き続き、2016年9月にも開催が予定されている。

フェスティバルは、複数の組織が共同で実施している。企画を担当するアンリミテッド組織は、障がい者アーティストや彼らが所属する芸術団体に作品の制作を委託し、障がい者アートのコンサルタントも務める。アーツ・アドミンは、アンリミテッド組織と共同して、運営面を支えている。アーツ・カウンシルは助成機関として補助金を出しており、ミーティングには必ず参加する。

ブリティッシュ・カウンシルは、障がいのあるアーティストと彼らの作品が世界で活躍する場を作り出している。たとえば、障がい者ダンサーのクレア・カニンガム［写真2］は、フェスティバルを機に世界各国で公演を行っている。

SBCは会場提供者としてここで作品を上演するという役割があるが、それだけでなく、委託した作品をセンターの企画にいかに創造的に組み込むかを考えている。アンリミテッド・フェスティバルの企画担当には2人のトップがおり、彼らの目下の課題は、英国の障がい者アーティストだけでなく国際的な海外のアーティストと協働すること、1950年代に建てられたSBCを、障がい者にとってアクセスが良く気持ちよい空間とすることである。

予算については、2012年のフェスティバルはオリンピックの助成金により運営されたが、2014年時はアンリミテッド組織がアーツ・カウンシルから得た助成金が充てられ、不足分はSBCが継続助成を受けている助成金から負担した。2016年についても2014年と同じ形態となる。

さまざまなパートナーと協働して事業展開するのは非常に難しいが、克服してやっていくと素晴らしいものができると担当者は語る。

Rachel Cherry

［写真2］クレア・カニンガムによるパフォーマンス

（3）レガシー

カルチュラル・オリンピアードは、国民、組織、国、それぞれのフェーズでレガシーを残した。

国民にとっては、文化との関わりについて考える機会となり、文化を通じて自身を見直す、自己探求の場となった。文化組織にとっては、自己発展、アイデンティティの強化が促進された。国にとっては、文化によって国の価値が高められ、共生社会の奨励につながった。

アンリミテッド・フェスティバルは、そのレガシーを象徴するイベントであり、多くの組織や人が連携しながら、文化オリンピックの遺産を守り、育てている。

4. まとめ

SBCは、フェスティバルサイトというアイデンティティに基づいて、さまざまな社会的課題を考えながら、多岐にわたる事業を展開し、4つのレジデント・オーケストラも、SBCのアイデンティティやコンセプトに沿って、優れた芸術文化を発信し続けている。

そのことによって、芸術文化の力を活用しながら、劇場・音楽堂等が果たすべき社会的役割を実現している。

このような取組が、文化オリンピックをきっかけに、文化の力を社会にはっきりと示すことにつながり、多くの国民や組織、そして国全体に変化をもたらした。

そしてまた、その変化を一過性のものとせず、レガシーを守っていく上で、SBCは大きな役割を果たしている。というのも、SBCのコンセプトは、ケリー氏の言うところの「芸術文化の力で人生や社会を変えていくことができる」ことであり、あらゆる人がそれを享受できることを目指している。SBCでは、文化オリンピックのレガシーを、施設のコンセプトと重ね合わせながら、オリンピックの精神を継承、発展させているのである。ケリー氏が「オリンピックのレガシーを守っていくことは、文化施設が関わらないとできない」と考えたとおり、SBCにはいまも確かにレガシーが息づいている。

そして、明確なコンセプトとともに、レガシーを支えているのは人材である。ケリー氏は、スタッフの資質について、専門的で高度なスキルをもち、施設の価値を探求していくこと、また立場にかかわらず、一人ひとりがリーダーシップを発揮して、正しいと思うことを進言できることだと話している。そのような人材によって、SBCの活動は支えられているのである。特に、アンリミテッド・フェスティバルのために、専属のスタッフを複数配置していることを見ても、施設の使命としてレガシーに向き合っていることがわかる。

オリンピックのレガシーを守りながら、常に芸術文化のもたらす変化の力を引き出すこと――SBCの取組は大変示唆に富むものであり、文化オリンピックの成功とレガシーの実現を支える一つの理想的なモデルと言える。

施設概要　サウスバンクセンター

■名称 ―― Southbank Centre

■所在地 ―― Belvedere Road, London, SE1 8XX

■開館年 ―― 1951年

■主な施設 ―― ロイヤル・フェスティバル・ホール（約2,800席）、クイーン・エリザベス・ホール（1,354席）※、パーセル・ルーム（372席）※、ヘイワード・ギャラリー※、ポエトリー・ライブラリー、多目的室、ショップ、レストラン、バーなど
※改修のため閉館中（2017年にリニューアルオープン予定）

■年間事業数 ―― 4,500（2014年）

■年間総支出 ―― 44,161,000ポンド（2014年）

■URL ―― http://www.southbankcentre.co.uk/